

柳之御所遺跡の変遷

Vicissitudes of the Yanagino-gosho Archaeological Site

羽柴直人

はじめに

- ① 柳之御所遺跡の変遷
- ② 平泉全体の変遷の中における柳之御所遺跡

おわりに

[論文要旨]

柳之御所遺跡は12世紀奥州藤原氏の拠点平泉の一部分を占める遺跡である。柳之御所遺跡の変遷は6時期に分けられる。1,2期は初代清衡、3,4期は二代基衡、5,6期は三代秀衡の時代に相当する。

1,2期は自然地形を利用した堀で囲まれた施設である。これは11世紀以来の安倍、清原氏の柵、館の系譜を踏襲した施設である。

3期は、堀は機能しているが、堀内部のまとまりが失われる段階である。柳之御所遺跡の重要性が1期、2期に比較すると相対的に低下しているようである。

4期は堀内部に道路が設置される。この道路は堀外部からそのまま連続しており、これは堀の区画、防御の機能を無視した状態で、堀の機能が失われたことを示す。

5期は前代からの中心域が拡大される。これは400尺の長さを基準とした区画で囲まれ、池を有する寝殿造に準拠する構造の施設である。

6期は1~5期まで連続していた中心域が廃され、北側約90mに新たな中心域が造営される。中心域の移動は柳之御所遺跡の性格に根本的な変化が生じたことを示す。

各時期の柳之御所遺跡の性格は、1,2期が政所の用途も兼ね備えた居所であり防衛性も備えた施設。3期、4期は藤原氏類族の居所。5期は当主秀衡の居所で宴会儀礼が盛んに行われる場所。6期は政所としての機能の施設と推測される。

柳之御所遺跡は12世紀を通して平泉内において重要な一つであったが、その構造、用途は各段階によって変化がみられるのである。